

ただおき  
神辺城主山名理興の出自

田口義之

私達の住んでいる備後地方は著名な戦国武将の少ないところである。山陰の尼子、防長の大内という兩大勢力のはざまにあったという政治的な条件、或は平野が少なく、山間の小盆地によって構成され統一勢力が出現しにくい、という地理的条件に影響された為かも知れない。

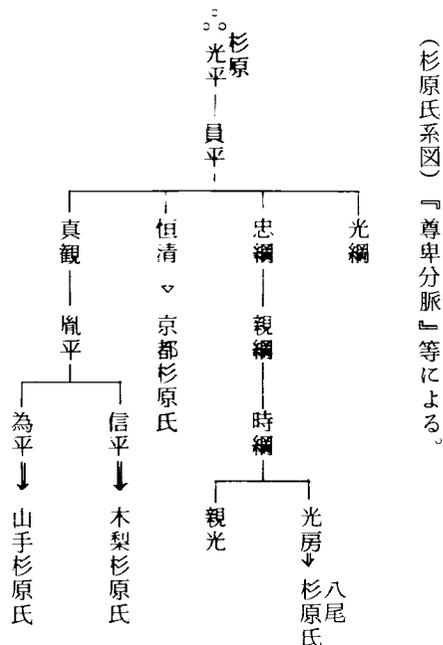
そんな中で一人異彩を放っているのが山名理興である。彼は備後の名族杉原氏の出身といわれ、天文七年(1538)七月、大内義隆の援助によって神辺城主となる。当時、備後の中心はのち水野勝成によって福山城が築かれる迄は室町幕府の守護山名氏の拠点である神辺城にあった。すなわち、大内義隆の理興に寄せる期待と信頼が知れるのである。

しかし、彼の野心は神辺一城ぐらいでは満足しなかったらしい。それは彼が神辺に入城すると杉原姓を捨て、「山名」理興を名乗っているのを見ればわかる。山名は備後の守護家である。それを冒すというのは彼が旧守護家の伝統を嗣ぎ、備後一国を支配しようとした抱負の現われである。こうして理興は大内氏の勢力を背景に着々と勢力を拡大し、天文十年(1541)頃には備後半国をその支配下に収めるに至った。けれどもこれだけでは第一級の戦国武将とは言えない。彼もその立場は良くわかっていた、大内氏の勢力下にいる限りはだめなのである。そこで彼は当然尼子の力を利用することを考えた。うまいことに天文十二年(1543)、出雲に侵入し、尼子の本拠富田月山城を攻撃した大内義隆は味方の裏切りによって大敗北を喫し、命からがら山口に逃げ帰ったのである。理興は尼子にかけた、そして周辺の大内方の城々を攻略し、同年の六月には安芸に侵入し、毛利元就の兵と戦っている。しかし、彼の野心もここまでで

あった。体制をたて直した大内氏は毛利元就と協力して理興討伐に立ちあがり、同年の暮には早くも神辺城に軍勢を向けたのである。以来、天文十八年(1549)九月、理興が城を捨てて出雲に逃走するまで秘術を尽した攻防戦が続く……。(『福山市史』上巻等)

以上が山名理興という戦国武将のあらましである。ところで、一般に戦国武将の素性は不明なことが多い。この理興という人物も例外ではない。その出自があやふやなのである。私は理興の略歴の最初に彼は杉原氏の出身であると述べたが、実はこの杉原氏というのが曲者なのである。杉原氏は中世備後で大きな勢力を持った豪族であるが単一の家ではなく、系図のように多くの一族を輩出し、それぞれが居城を構えて独立していたのである。

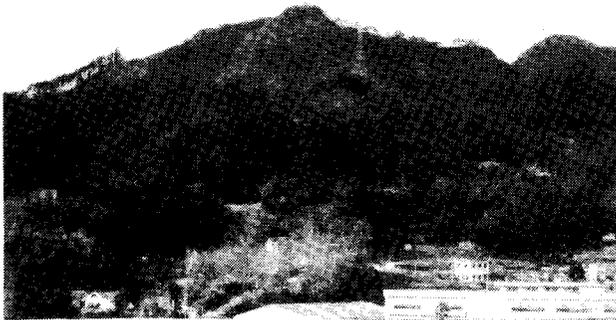
余り小さなことにこだわらない人ならば、理興は杉原氏の出と聞けば「はあそうか」とそれ以上追求しないであろうが、私などのよ



うにそういった小さな疑問に抱泥する者にとってはそれでは済まされない。当然「理興はどの杉原氏の出身だろうか」というところまで思考が進むのである。

そこで、関連する文献史料をひもといたわけであるが、私見を披露する前に備後杉原氏について少し述べて置きたい、そうすればあとの説明が楽である。

杉原氏は学者の説によると備後自生の豪族で御調郡杉原保(広島県尾道市)がその名字の地であろうという(福山市史)。又、『尊卑分脈』等の系図によると恒武平氏貞盛流で、平季衡が丹波国杉原に任じたのが始まりという。伝説では季衡の孫杉原伯耆守光平が鎌倉時代



八尾杉原氏の拠った八尾山城跡(府中市出口町)

の初期備後守護職に任せられ当地に下向、府中の八尾山(府中市出口町)に居城を構え土着したという。その後、惣領家は代々八尾山城に住し室町時代に至る(「八尾杉原氏」という)が、その支族の杉原信平、為平兄弟は南北朝時代、足利尊氏に従って戦功があり、建武三年(1336)、備後国木梨庄(尾道市北郊)地頭職を獲得、信平はその地に鷲尾城を構え、その子孫は備後有数の豪族として発展して行く。これが「木梨杉原氏」で室町時代には惣領家をしのぐ勢力を持っていたという。又、為平も木梨庄半分地頭職を有し、同庄内に家城を構えて住したが、のちその子孫は山手の銀山

城(福山市山手町)に本拠を移した、これが「山手杉原氏」である。

理興の出身は杉原氏、というのが本当であれば、以上三つの杉原氏の内いづれかにそれが求められるはずである。事実、いろんな文献を読んでいくと、理興の出自に関してはそれら杉原氏の中の二つ、すなわち「八尾杉原氏出身説」と「山手杉原氏出身説」の二説が存在することがわかるのである。

「八尾杉原氏出身説」は『福山志料』、『西備名区』、『備陽六郡志』といった江戸時代の郷土地誌に述べられているもので、代表として『備陽六郡志』の記事をあげれば、その「後得録」芦田郡本山村のところに

「八尾の城、山名宮内少輔理興の古城なり。」

とあり、理興は始め八尾山城に居城していたこと、すなわち理興は八尾杉原氏の出身であるというのである。更に『芦品郡誌』を見ると、そのP 319。出口町 古城址八尾城として「(略)其子を忠興(理興)といふ、大永四年尼子氏に属し、毛利氏と共に大内軍を佐東金山にて敗る、後大内氏に属し、天文七年大内義隆の命に依り、山名氏政を神辺城に討ち、其賞として神辺城を賜ふて、

之に入る」として次の系図をあげている。

(杉原) 基康——時興——**忠興**

石見守 宮内少輔 初理興  
伊豆守 宮内少輔

すなわち、これによれば理興は八尾山城主杉原時興の子であるというのである。

「山手杉原氏出身説」は山手杉原氏の子孫に伝えられたもの。同氏は後に毛利家臣となり長州萩に移り住んでいるが、毛利氏の根本史料集である『閩閩録』に収録された杉原与三右衛門家々譜に

「 (略)  
 杉原播摩守匡信  
 備後国沼隈郡山手之城主  
 杉原豊後守理興  
 備後国山手之城主 」

とあって匡信の子が理興であるというのである。この場合、理興の事跡の中に神辺城主としての記述はないが、それは理興が現主君の毛利氏に敵対したことをはばかってのことであろう。この書物は現在史家の間で評価の高いものであるから、その系譜類も信頼性が高いといえよう。

以上二つの説をくらべてみるときわだった違いがあるのに気づく。それは地元の伝承と一応は名の通った史料に基く説の違いである。こういう時、学者はどう判断するであろうか、もちろん名の通った史料の方を取るのである。この場合もそうである。大学の先生方の書かれた『福山市史』上巻を見ると、「杉原理興の出自については異説もあるが、福山志料は八尾杉原氏の出と推定、大体山手杉原氏の出と見らるべきであろう。閩閩録六八三四等」というのである。『福山市史』は現在この地方で一番レベルの高い史書であるから、これは通説といって良いであろう。しかし、どうも私はこの説に反発を感じるのである。信頼性が高い書物に書かれていることは皆真実なのであるか。地元の伝承などというのは所詮取るに足らぬもので、史料としては認められぬものなのであるか。

私は「伝承」というものも一概に捨て去るべきではないと思うのである。つまり、この場合理興は八尾杉原氏の出身であるとする説に魅力を感じるのである。地元の伝承を尊重したいという在野研究者の意地だけではない、『閩閩録』の山手杉原家譜には何かカラクリがあるように思われてならないのである。

理興は出雲に逃れたのち、弘治元年(1555)毛利元就に詫びを入れて許され、神辺城に帰っているが弘治三年(1557)春、中風で病死してしまう。彼には子がなかったのもその跡目は吉川元春の強い推挙で理興の四番家老、山

手銀山城主の杉原盛重が相続する(『陰徳太平記』等)。そして、毛利家中杉原与三右衛門家はこの盛重の兄直良の子孫なのである。杉原与三右衛門家譜によると次のようになる。



そうすると不思議なことに気づく、理興と盛重の関係は養父子とすれば筋が通る。しかし、気を付けなければならないのは盛重は元理興の四番家老であって吉川元春の推挙で神辺城主となったという事実である。神辺城は毛利氏にとっても重要な城である。明城にしておくわけにはいかない。そこで毛利氏は杉原盛重を部将として入城させたのである。養子でも何でも無い、それは結果なのである。つまり、この系譜には作為が加えられている可能性が大きいのである。

元々理興は八尾杉原氏の出であったが、盛重がその跡を継いだことによって山手杉原氏の系譜の中に取り入れられた、こう考えた方が良いのではなかろうか。そうすれば地元の伝承も生かされると思うのである。

(福山市多治米町916)